

風姿花伝第六、
花修くわしゆ云 一 能の本を書く事

一、能の本ほんを書く事、この
道の命いのちなり。究きわめたる才学さいがく
の力ちから無けれども、たゞ工たくみに
依よりて良よき能のうには成なるもの
也。大方おほかたの風体ふうてい、序・破じよ・は・
急きうのだんに見えたり。殊こと
更さら、脇わきの猿楽ざるがく、本説正ほんぜつたゞしく

〔口訳〕 能を作書するといふことは、能楽
道の生命ともいふべき大切なことであ
る。そして、学才に於て深遠な造詣を
究めて居なくても、ただ工夫按配の巧
妙さによつて、良い能が生れるもので
ある。大体の能の風体のことは、序破
急の段（問答条々の第二段）に記され
て居る。殊に脇能は、その素材典拠が
正確なものを必要とし、その曲の冒頭
から、その由緒をのべ、何人もよく知
つてゐるやうな来歴を書くやうにすべ
きである。そして、さのみ細かな風体
を演ずるやうな能を書く必要はなく、

て、開口よりその謂れと、
やがて人の知る如くならん
ずる来歴を書くべし。さの
みに細かなる風体を尽くさ
ずとも、大方の懸かり、直
に下りたらんが、さしより
花々と有るやうに、脇の猿

大体の風情風趣がさらさらと滞りのない素直な曲で、最初から花々しい感の出るやうに、脇能をば作書すべきである。又、二番目・三番目・四番目等の曲に於ては、十分に用語辞句を練り、能の風体をも尽すやうに、細かに作書すべきである。その中でも、たとへば、名所旧跡を題目としたやうな能ならば、その名所旧跡を詠じた詩歌の文句で、人口に膾炙して居るやうなものを、能一曲のやま（眼目の所）に配置して書くべきである。シテの謡ふ所でもなく、又シテの演技にも無関係なやうな

楽をば書くべし。又、番
数に至りぬれば、如何にも
く、言葉風体を尽くして、
細かに書くべし。仮令、名
所旧跡の題目ならば、その
所に因りたらんずる詩歌の
言葉の、耳近からんを、能

所には、肝要な文句などを使つてはならない。何といつても見物人が一心に見、一心に耳を傾ける所は、上手の演技であり上手の謡ふ所であつて、その他のものには大して注意を向けるものではない。従つて、一座の棟梁たる上手のシテの謡ふ面白い文句、又、面白い演技が、見物の眼に映じ心耳に響けば、見物人は即座に感に打たれ恍惚とするのである。この点に細心の顧慮を払ふことが、能を作書する第一のコツである。

の詰め所に寄すべし。為手の
言葉にも風情にもかゝら
ざらん所には、肝要の言葉
をば、載すべからず。何と
しても、見物衆は、見る所
も聞く所も、上手をならで
は心にかけず。さるほどに、

棟梁の面白き言葉・振り、
目にさゑぎり、心に浮かめ
ば、見聞く人、即ち感を催
すなり。これ第一能を作る
手だてなり。
たゞ、優しくて、理の即ち
に聞こゆる様ならんずる詩

能を作書するには、専ら優雅な言
葉で、耳に聞いて即座にその意のわか
るやうな詩歌の言葉を用ひるやうにす

歌の言葉を採るべし。優し
き言葉を、振りに合わすれ
ば、不思議に、自ら、人体
も幽玄の風情に成る物也。
硬りたる言葉は、振りに応
ぜず。しかあれども、硬き
言葉の耳遠きが、又よき所

べきである。優雅な文句に合せて演技
の振りしぐさを演ずれば、不思議に、
自然とその人体も優雅な風情になるも
のである。硬々しい枯屈な言葉はふり
にうまく合はないものだ。しかし、硬
い言葉で且つ聞き慣れないやうな言葉
が、良い場合もある。それは、其の曲
の素材をなす人体の如何によつて、似
合ふ場合があるやうだ。これ等は、其
の素材の、支那又は本朝の来歴由来
に従つて、その語の格調も心得分けて
用ひねばならない。ただ退くべきは卑
しく俗な言葉で、さやうな言葉を用

あるべし。それは、素材の
人体に依りて、似合ふべし。
漢家・本朝の来歴に従つて、
心得分くべし。たゞ、卑し
く俗なる言葉、風体悪き能
に成る物也。

ひると能は風体悪きものになつてしま
ふ。

然れば、良き能と申は、本

以上述べたやうな次第であるから、

説正しく、珍しき風体にて、
詰め所ありて、懸かり幽玄
ならんを第一とすべし。風
体は珍しからねども、煩わ
しくもなく、直に下りたる
が、面白き所あらんを第二
とすべし。これは凡その定

「良い能」といふのは、其の典拠が正しいもので、其の風体に珍らしさがあり、又曲のやまともいふべき眼目の所をも備へ、全体の風趣が優雅なものを第一等とすべきである。風体は別に珍しい所は無いが、ごたごたとした所もなく、のびのびとして素直な懸りで、それで面白い所のあるといふのを第二等のものとすべきである。これは大体的な標準矩格を示したものだ。ただ能は、どこか一節、上手の手にかかつて美しい風情を作るやうな便り所さへあれば、それで面白いものとなるであ

めなり。ただ能は、一風情

上手の手に掛かり、便りだ

に有らば、面白かるべし。

番数を尽くし、日を重ねれ

ば、仮令悪き能も、珍しく

為替へく彩れば、面白く

見ゆべし。されば、能はたゞ

らう。番数も多く演じ、又数日に互る演能であれば、たとひ悪い能でも、それを珍らしいやうに演じ替へ演じ替へして、色どりを加へたならば、面白く見える曲となるであらう。だから、能といふものには、時分といふものが入用なのだ。悪い能だからと捨ててしまつてはならない。それを生かすことは、演者の心づかひ一つだといふべきだらう。

時分いればなり、悪き能と
て捨つべからず。為手の心
遣いなるべし。

但し、ここに様あり。善悪
に為まじき能有るべし。如
何なる物真似なればとて、
仮令、老尼、姥、老僧な

どの形して、さのみ狂い怒
る事有るべからず。又、怒
れる人体にて、幽玄の物真
似、これ同じ。これを真の
似而非能、きやうさうとは
申すべし。此心、二の巻の
物狂いの段に申たり。

但し、ここに心得ねばならぬ仔細が
ある。どんな事があつても絶対にして
はならない能がある。たとひどんな物
真似だといつても、たとへば、老尼・姥・
老僧などに扮して、むやみに狂ひ怒る
などといふ事は、あるべき事ではない。
又怒つた人体に扮して、それで幽玄の

振舞などをするといふのも同断であ
る。かやうなのを真の「似而非能」と
も「きやうさう」ともいふべきだ。こ
の心得は、二の巻（物学条々）の物狂
の段に申しておいた。

又、一切の事に、相応無く
ば、成就有るべからず。良
き素材の能を、上手の為た
らんが、而も出で来たらん
を、相応とは申べし。され
ば、良き能を上手の為ん事、
などか出で来ざらんと、皆

又、一切の事に、相応といふ事を欠
いては、物事は成就しない。良い本説
を素材とした能を、上手な役者が演
じて、しかも立派な演出効果の上つた
のを、相応といふべきである。それで、
一般の人々は、良い能を上手な演者が
演じたならば、不出来なことなど有
りやう筈がないと思ひなれてゐるやう
だけれど、不思議に演出効果の上らな
い事があるものである。これを、眼識
の高い批判者は十分に見分けて、演者
に欠点の無い事を知りけれども、普通
一般の見物人は、能の曲柄も悪く、演

人思ひ慣れたれ共、ふしぎ
に出で来ぬこと有る物也。
これを、目利きは見分けて、
為手の咎も無き事を知れど
も、たゞ大方の人は、能も
悪く、為手も其程にはなし
と見る也。抑、良き能を上

者もさして上手ではないといふ風に感
ずるのである。一体、良い能を上手な
シテが演じて、それでどうして出来栄
が悪いことが起るのだらうと、その点
に、反省公案をめぐらして見ると、或
はこれは、時分の陰陽がうまく相和さ
ない為に起るのであらうか、又、演者
に「花」に対する公案が欠けてゐた結
果であらうか。どうも不審な所がま
だ晴れない。

手の為^せん事、何^{なに}とて出^いで来^こ
ぬやらんと工夫^{くふう}するに、も
し、時分の陰陽^{いんやう}の、和^{くわ}せぬ
所^{ところ}か、又は、花の公案^{こうあん}無^なき
故^{ゆへ}か、不審^{ふしん}尚^{なを}残^{のこ}れり。

〔評〕

此の段は能作に関して、其の大要の点をのべたものであつて、問答条々

に、「序にいはく、『歌道を少し嗜め』とはこれなり。これ芸能の作者
別なれば、如何なる上手も心のままにならず。自作ならば、ことばふ
るまひ案の内なり。されば、能をせん程の者の知才あらば、申樂を作
らんこと易かるべし。これ此道の命也」とある条に対する精しい口伝的
な部分と見る事が出来る。而して、後世、応永三十年に及んで作られた
「能作書」に到つて、この段の所論は完成円熟したものと見るべきであ
らう。

此の段は、先づ、能作の必要を説き、次に脇能及び二三四番目物の

書き方の要領、名所旧跡の題目の能の特殊的な注意をあたへてゐる。ここで、我々に興味のあるのは、「極めたる才学の力無けれども、たく、みによりてよき能にはなるものなり」といふ一句である。「才学に於てさして堂奥をきはめたる造詣は必要としない」といふのは、謡の文句が見物人の耳から入つて直ぐに理解せられる程度のもの、人口に膾炙して居る名句を綴り合はせるといふ主張から言つて、如何にもと肯けるのである。読んで味はふ名文と、聞いて感ずる名文との相違、この点は、五十嵐博士が新国文学史の中、謡曲の条で、極めて適切に説いてゐられるが、謡曲の文章は聞いて感ずる名文たることを絶対に必要とするものなので

ある。学才を何程究めた者でも、この点の顧慮を欠いては、謡曲詞章は作れないのである。「たく、みによりて良き能になる」といふたく、み、これは以下精細に世阿弥によつて説かれる所であるが、能に通じた者でなくては、このたく、みは把握し難いところである。

「たくみ」の第一として、名文句は必ずシテの謡ふ所、又はシテのふ、ま、ひを生かすやうな所に用ひるべく、その他には用ひる勿れといふ。言葉に対する愛着と節約の精神を見るべきであらう。良い言葉は、最大効果を發揮し得る所に用ひられてのみ、はじめてその語の全力を發揮し

得るからである。第二として、用語は、やさしく、理の直ぐに理解せられるやうな詩歌の語を用ひよといふ。これは幽玄の風趣を生み出す根元になるものであるからである。又、桔屈な硬い言葉も、用ひ所によつては、効果をあげ得るものであるとのべ、絶対に退くべきは、卑しく俗なる言葉であると断じてゐる。幽玄を以て生命とする能の立場としては、まことに尤もな注意である。

次に、良き能の条件を示して、第一等、第二等の序列を示し、その次に「能は一ふぜい上手の手にかかるたよりだにあらば面白かるべし」

といふ注目すべき語を出してゐる。これは誠に興味がある。上手な役者が演ずるに、演じ甲斐のあり、上手の腕を見せるやうな曲所が一つあれば、それで面白い能であるといふので、これは今日の能に於ても同様であらう。どこか一ヶ所、見物人をあつと感歎せしめ満足せしめてくれれば、それで見物は満悦するのである。又悪き能については、これを珍らしく仕替へる可能性のあるものであれば、捨てるに及ばない。どうしても演ずべからざるものは、幽玄なるべき扮装で怒り狂ふ曲、怒れる人体で幽玄の物真似をする等の曲であるとして、「物狂ひ」の段の注意と対応せしめてゐるのである。

最後に、相応といふ立場から、良き能の演出効果について一つの注意をあたへてゐる。曲が良く、演者が上手であれば、当然その能は成功すべき筈であるが、時によつて、必ずしも成功するとも限らない事があるといふ。それを見て、曲が悪い、或は演者が悪いと、早合点してはならない。多くの場合、これは陰陽の和せぬ為か、花の公案の不足な為かであつて、曲の罪でない事が多い。従つて、これは能作者としては、如何とも致し方のない事で、曲の善悪の鑑定に当つては、注意すべきであるといふ意見だと思はれる。